

也、いづてぶねは一人してこぐ船也、

和語抄云、いづて舟とは、かぢひとつ、ろよつある船をいふ也、

私云、ひととは、二人を云也、かぢひとつ、ろよつと云は、一人をひとと云にや、いはれず、

又日本紀に、熊野の諸手舟と云ふねあり、もろ手の船と云也、されば五手の船も、あしからず、但

舟の大小にしたがひて、ろをばたつるに、二手三手四手六手とはよますして、五手としもよめ

ることぞ、いかゞときこゆる、萬葉に、八楫かけとよめるは、かぢとはいへど、ろをよめるなり、そ

れはおほかるかすをとりて八と云也、五手は、なに、もあらざる歟、楫は、とりかぢおもかぢと

て、二には過ぎる物なり、但八は陰數のおほかるなり、さてやそ、やをなどよめり、五は陽數のお

ほかる也、さていを、いとよむ也、さればいづ手はおほかるかす也、

〔倭訓栞中編一〕あしがらぶね。足柄小船也、萬葉集に見えたり、又とぶさたて足柄山に船木き

り、ともいへる、此所より出るをもて名付くるにや、足柄山は相模にあり、又足輕の義を取て名と

せるにや、新千載集に、足はや小舟と見えたり、

〔萬葉集十卷四〕相聞
母毛豆思麻安之我良乎夫禰安流吉於保美目許曾可流良米己許呂波毛倍杼、

右十二首○十一 相模國歌

〔袖中抄十五〕あしがらぶね

顯昭云、あしがらぶねは、相模のあしがらの小船也、相模防人の歌也、或人云、葦刈小船也、ら

とりと同音也、

或人云、足輕を舟也、らとりと同音也、萬葉には、あしがらをは、あしかりともよめり、りらと

同音也、